

「第4回愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会」に関する傍聴者の御意見と傍聴者の質問に対する回答など

氏名	御意見	質問に対する回答など
小川	<p>今本氏に質問です。小島氏が盛んに口にする「疎明」とは“確信ではなく、確からしいという推測を裁判官に生じさせる当事者の行為。またこれに基づき裁判官が一応の推測をしている状態”のことである。であるならば、今回今本氏が引用している「土木学会社会資本問題研究委員会（1992.7）の椎貝教授の報告にはP40、10行目から「塩水楔の計算は、一部「吉川秀央：河川工学」に依っているもので、それに従えば、次のような簡単な説明が可能である（小生中：これぞ”疎明”ではないか）。</p> <p>河川の自流が全くなかった場合、海水が35km地点まで侵入するものとする。これは図5-3の水面を延長すれば良い。</p> <p>これに僅かな河川流量を加えれば、海水は海側に押し戻される。河川流量が濁水量に相当する30 m³/sの場合（この数値はしばしば引用されている）、海水が数キロメートルほど海側に押し戻されて、海水の先端が30kmあたりに後退することは容易に想像できるから、図4-5の計算結果も納得がいくものである。」としている。なぜこの部分を今本氏は引用しないのか？椎貝氏はさらに「本来、河川工学においては、このような常識的（小生・付与）判断がもっとも重要なものであり、その意味でこのあたりの記述は妥当なものである」とまで述べている。ところで図5-3が私にはどれかすぐに分からないが、H24.9.3の現地視察の際の資料1-2中の資料11をみると平成22年の長良川の河床が朔望平均干潮位つまりほぼ常に海の下である高さに達するのが河口から30km地点であることから、小島氏の言う“疎明”のレベルでは、河口堰を開門すれば30km付近まで潮があがることを前提とすべきでは？</p>	
保屋野 初子	<ol style="list-style-type: none"> 1 初めに傍聴し、たいへん理念的・理論的な（とくにアレクサンダー・ジンク氏の講演）な議論とともに、長良川河口堰及び河口域に関する詳細なデータ評価の検討も行われていることは非常に高く評価できる検討委員会である。さらに議論が進んだ段階で、もちろん国との合同検討の場が必要であり、そうなるものと思うが、そのさいに、やはり漁民や農民、その他環境関係住民のヒアリングに参加を求めたい。 2 ジンク氏が指摘した、河口堰の操業の費用対効果を現時点で再考する必要がある。それも今後明らかにしてほしいことである。 	